

端島（軍艦島）における聞き取り調査及び現地調査

後藤 恵之輔* ・ 森 俊雄**
坂本 道徳*** ・ 小島 隆行***

Interview and Field Survey on Hashima (Gunkanjima)

by

Keinosuke GOTOH*, Toshio MORI **, Doutoku SAKAMOTO***
and Takayuki KOJIMA***

In recent years, the small island nick named as 'Gunkanjima' (formal name "Hashima") located in the southwest of the Nagasaki harbor attracted a lot of attention. Historically Gunkanjima, an island rich of coalmine supported modernization of Japan by supplying invaluable energy. However, abrupt shift in energy use during the 1970s forced the closure of the mines in this island on January 15, 1974. Eventually, since almost thirty years this island became an uninhabited island. But still there are many cultural heritages valuable from scientific standpoint left in the island, including the first Reinforced Concrete Apartment Building in Japan. In this paper, we have summarized the results of the interview with the former residents of this island and also the field survey in "Gunkanjima". This investigative study indicated that, the community structures followed by the residents of this island in those days, can be an ideal model to solve the present social problems arising in Japan. The results of the study also revealed the immense importance of Gunkanjima to be preserved as an industrial heritage, symbolizing the industrial growth of Japan. Hence got sufficient potential to be utilized as a scientific research center for the future generation and which in turn would promote revitalization of the surrounding areas.

1. はじめに

近年、長崎港の南西に浮かぶ小さな島、軍艦島（正式名称「端島」）が注目を集めている。2003年8月の「軍艦島を世界遺産にする会」の特定非営利活動法人（NPO）認証を受けて、その注目はさらに高まってきている。

この端島は、炭鉱の島であり、日本の近代化を支えてきたが、エネルギー転換に伴い、1974年1月15日に閉山した。今では無人島となっているこの島には、日本初の鉄筋コンクリート高層アパートを始め、学術の見地からみても貴重な文化遺産が数多くあり、島そのものにも研究の要素が多く含まれていると考えられる。

そこで本研究では、元島民の方々への聞き取り調査および現地調査を行い、当時の様々な生活の様子を浮

かび上がらせるとともに、その近代化遺産としての価値を再検討することにより、今後の近代化遺産の活用方法について考えることを目的とする。

2. 端島の概要

軍艦島とは、長崎県西彼杵郡高島町端島（東経129度45分、北緯32度39分、図-1参照）のことで、海底に広大な鉱区を持つ、海底炭鉱の島である。長崎港から18.5kmの海上にあり、総面積6.3haで東西160m、南北480m、周囲1.2km、最大高さ47.7mの小さな人工島である（写真-1参照）。元は現在の3分の1程度の岩礁に過ぎず、海底を掘ったズリ等を用いた埋め立てにより現在の姿になった。明治時代には住人の数が2000名を越え、1960年頃には5300名以上の人が住んで

平成16年10月21日受理

*大学院生産科学研究科 (Graduate School of Science and Technology)

**社会開発工学科 (Department of Civil Engineering)

***NPO法人「軍艦島を世界遺産にする会」(NPO "The Way To World Heritage Gunkanjima")

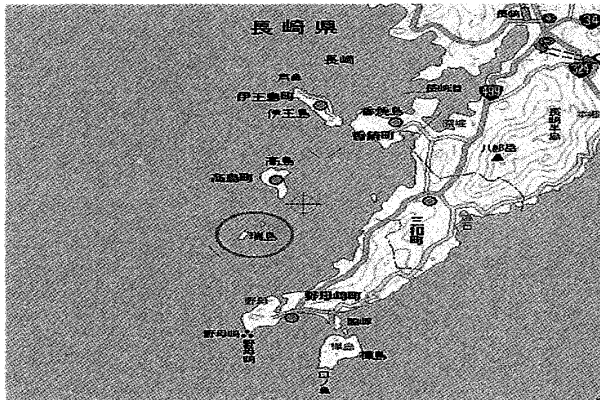


図-1 軍艦島の位置

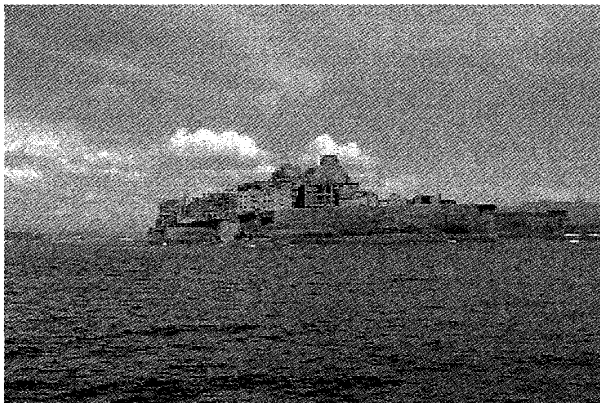


写真-1 軍艦島の外観

いた。居住地区に限って考えると、1 haあたり1000人以上の人が住んでいた計算になる。

端島は炭坑により成り立っていた島であったため、炭坑が閉山してしまっすぐに全ての住民が島から離れた。そのため閉山から約30年、端島は当時の面影を残したまま劣化が進行している。

端島の経緯としては、1980年（明治23年）に鍋島孫六郎から10万円で三菱が買収、その後80年間に渡り主に八幡製鉄所への良質炭を1974年（昭和49年）1月15日の閉山まで採掘していた。2001年11月21日にはそれまでの所有者である三菱マテリアル株式会社（元三菱鉱業）から正式に長崎県西彼杵郡高島町へ無償移譲された。さらには、その高島町も昨今の市町村合併の波に洗われ、2005年1月4日に長崎市へ合併されることが決定的となっている。

3. 聞き取り調査

3.1 調査方法

当時、端島で生活をしてきた方、および端島に関わりを持っていた方を対象に聞き取り調査を行った。調査項目を大別すると以下のとおりである。

①個人属性について

- ②当時の生活について
- ③端島における災害について
- ④現在の想いについて
- ⑤その他

これらの内容に関して、数項目ずつ質問をして当時の様子の実態を把握し、保存することを目的とした。

3.2 調査結果

今までに数名の元島民の方への聞き取り調査を行った。その中で当時の様子が少しずつ浮かび上がってきた。

3.2.1 当時の生活について

当時の生活について快適であった、不便であった点についてであるが、沖合の島であるがゆえに「船の欠航」というものが悩みの種であったようである。島内には、ほとんど全ての生活用品を手に入れることができる店舗が存在したが、その物資は本土から船で運ばれてくるため、海がしけると長崎から物資が届かなくなる。母親たちは台風の接近前等には買いだめをするために、店へと走ったとのことだった。逆に小さな島の中にも生活に必要なものを売る店がそろっていたため、すぐ近くで何でも手に入れることができたという点を長所に挙げる答えもあった。

また、身近にあったものは生活用品などの物資だけではない。このことを元坑員の子供で、端島で生まれ育った元島民は次のように語った。

「とにかく狭い島ですからね。同年代の友達の家が、とにかく歩いていける距離にあるという、それが良かったですね。」

衛生面や居住スペースなどに関して、居住環境は決して良いとはいえない当時の端島ではあったが、その代わりに物資、人というものがいつでも身近にあったということが出来る。

また、当時、三菱マテリアルが所有していた端島炭坑で働いていた人々の待遇はとてもよかったという。このことについて元坑員夫人は次のように語っている。

「当時、家賃は2円でした。電気代や水道代は何もいらなかったです。ガスはプロパンガスの引換券を一軒に何枚か無料で配っていました。それ以上必要なときは買っていました。」

端島では電化製品などの普及率も高く、端島で暮らしていた人々の暮らしぶりは本土の人々と比べても良かったという。

3.2.2 コミュニティーについて

コミュニティーについての質問に対して、近所付き合いはあまりなかったという答えもあったが、ある坑員夫人は次のように語った。

「でも端島は天国でした。最高でした。もう、友達も多いですしね。ほんと、兄弟みたいですがもんね、端島の中はですね。皆さんいい人ばかりで。私が忙しいときとか、お風呂に行くときもですね、皆さんが協力してくださったから、楽に子どもを育てることができました。」

また、この夫人は次のような話もしてくれた。

「端島には電話が二箇所くらいにしかなくて、そこに電話があると、誰かが伝えてくれてるんですよ。わざわざ直接呼びに来るんじゃなくて、ことづけが自分のところに回って来るんですよ。」

この言葉から、少なからず現在のコミュニティーと比べると、隣近所との付き合いは深かったということが伺える。またこの話の内容から、当時の端島では地域で子どもを育てることが自然にできていたと考えられる。

また、別の坑員の息子で、端島で生まれ育った元島民はコミュニティーについて印象に残っていることを次のように語っている。

「コミュニティーに関しての一番の思い出はやはり、他人にも怒られるということです。たとえば、危ないところに行ったりすると、自分の親でなくても誰からも怒られていました。今ではなかなかないことです……。」

現在、青少年に関する問題が増加している。これらの問題に対して、現在では地域が協力して子供を育てていくという取り組みが行われているところもあるが、当時の端島はそれが自然とできていたのである。

しかし一方で、このような意見もあった。端島で生まれ育った元島民の言葉である。

「どこでも付き合いは良かったと思いますよ、当時は。端島に限らず。」

確かにそのとおりのかもしれない。しかし、現在、当時のコミュニティーについて私たちが知り得る術は少ない。そこで、当時の面影のままに、現在に存在する端島とともに当時のコミュニティーがどうであったかを保存することは、重要であると考えられる。端島は炭坑の島という一面の他に、コミュニティー形成都市のモデルともいえるべき一面も持っているのではないだろうか。これらのことは端島が教育の分野からみても貴重な教材となり得ることを示している。

3.2.3 建物について

建物について元島民は次のように語った。

「高層アパートではありましたが、階段の高さがそんなに高くなかったと思います。若いこともあったからかもしれませんが、上り下りはそんなに苦労しませんでした。」

エレベーターが設置されていない高層アパートの中で、少しでも快適な居住空間になるような細やかな工夫がなされていたことも、垣間見ることができる。

また、島内には日本で最初の鉄筋高層アパートを始めとして、建物の多くが鉄筋コンクリート造りである。端島で鉄筋高層アパートが次々と建造された要因には、限られた居住区の中で最大限の収容能力が求められたことと、建物が集中しているため火事に強い素材を使用する必要があったことが挙げられる。

3.2.4 島の催しについて

島の催し物に関して元坑員は次のように語った。

「職場単位の海水浴、花見、忘年会とかありましてね。やっぱり小さい島ですけど、人と人の仲は良かったですね。」

当時、端島の中では様々な催しが行われていた。そのひとつが毎年4月3日に行われていたという山神祭である。山神祭では島民ははっぴを着て参加していた。内容としては、御くんだりや相撲大会が行われていたという。この他にも、秋の端島小中学校の運動会や職場対抗の野球大会など、住民参加のイベントが多くあったようである。

また、ある坑員夫人は次のような話をしてくれた。

「和裁や洋裁、お花や料理教室などが公民館であったんですが、私は全部行きましたよ。」

これらの様々な催し物は、端島の住民がお互いに顔を合わせる機会を与え、この催し物の多さが端島のコミュニティー形成の一部を支えていたのではないかと考えられる。

3.2.5 屋上農園について

端島は別名「緑なき島」とも呼ばれていた。島内にはほとんど植物が生息する場所がなかった。住民はそれでも植物を身近に置くように努力していたようで、元坑員夫人は当時の様子を次のように語った。

「ベランダとかに鉢植えを植えている方が多かったですよ。業者の方が端島に花を売りに来ると、すぐに売り切れていました。」

このような状況の中で注目されることが、当時この端島内において屋上農園が存在したということだ。他

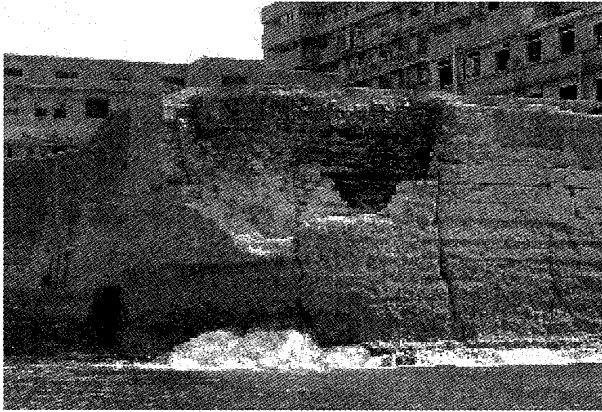


写真-2 護岸の破損部分①

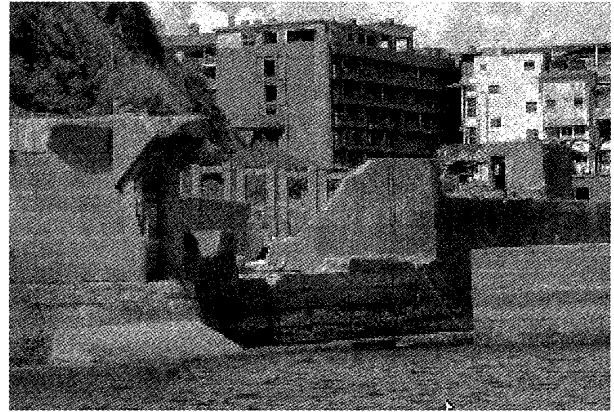


写真-3 護岸の破損部分②

にスペースがなかったということで、屋上に土を運びトマトやキュウリなどを栽培していたということである。さらに驚くべきことには屋上でお米まで作っていたということである。アスファルトに覆われた、限られた空間の中でいかに緑を育てるかという、当時の生活の知恵がこの端島には詰まっている。

この屋上農園に関して現在、屋上緑化の温暖化を緩和する効果について研究が行われているが、この端島の屋上農園は日本で先駆的な屋上緑化をしていたことになる。

3.2.6 端島における災害について

端島はたびたび台風により大きな被害を受けた。大きな台風により、護岸の崩壊や桟橋が流されるということもあったという。端島に当たる波の強さがある元島民は次のように語っている。

「台風などで印象に残っていることは、島そのものが揺れるということです。特にビルの4階や5階に住んでいる人は揺れを感じていたと思います。これは台風のときだけでなく、しけているとき、強い波が島に当たるときも揺れを感じました。」

この言葉から、いかに端島の護岸にぶつかる波の力が強かったかということが想像できる。

これらの台風に対しての防災対策についてある元島民は次のように語っている。

「自分たちが青年になってからは、各家庭の台風対策を必ずやっていました。ちょっと地下になっているところにはすごく潮がくるから大変だったですね。泥を積んだりして備えていました。」

台風に対しても、島民が協力して対策や復旧作業を行っていたということがよく分かる。

4. 現地調査

ヒアリング調査と併せて、現在の端島の護岸や島内

の建物の劣化状況等について現地調査を行った。

調査日時：2003年9月15日（水）

調査方法：海上からの目視による劣化状況の把握

4.1 護岸の破損

現地調査を行う前の一ヶ月の間に九州地方を二つの大きな台風が通過した。2003年8月30日の台風16号、同じく9月7日の台風18号である。これら二つの台風による護岸への影響が心配された。

実際に現地で護岸を目視調査すると、大きな破損部分が発見された（写真-2参照）。調査に同行していただいた高島町職員の方の話によると、以前よりも破損部分が大きくなっているということであった。この部分の他にも護岸に大きな亀裂を多数見受けられた（写真-3参照）。島の大部分が埋め立てにより形成されているため、護岸に生じた亀裂から海水が浸入すると内部の基礎が流れ出してしまう恐れがある。つまり、護岸の崩壊は島そのものの存在を危険にさらすこととなる。聞き取り調査を行った際に、端島で生まれ育った元島民は岸壁の印象を次のように語った。

「海底から真っ直ぐ伸びている護岸、これが一番の思い出。どうやって作ったとかなって、子ども心に興味が湧きました。」

しかしその強固な護岸は、長年にわたる台風や高波により崩壊の危機にある部分が多い。端島はその形状に大きな特徴をもつため、もしも岸壁の崩壊から建物が今以上に崩壊してしまうと軍艦島と呼ぶことができなくなる可能性もある。この貴重な近代化遺産を守るためには、まずは岸壁の補修・補強が急務であると言える。

4.2 鉄筋コンクリートの劣化

また、島内には様々な状態のコンクリートの劣化が見受けられた。端島では、一番古い鉄筋コンクリート

造りの建物は1916年（大正5年）に建てられ、それから現在までおよそ90年の年月が経っている。およそ90年前の鉄筋コンクリートが現在、自然劣化によりどのくらい劣化しているのかを把握することは、今から90年後における鉄筋コンクリート造りの建物の状態を推測する大きな手がかりになると考えられる。本来ならコンクリートのひび割れが生じたり、異常が確認されたりした時点で何らかの補修がなされる。しかし、この端島は特に1974年（昭和49年）の閉山からの30年間は人の手が加えられなかった。このことから端島は、鉄筋コンクリートの自然劣化の進行などを研究する上では、とても貴重な研究素材になるのではないかと考えられる。

さらに、端島は周りが海に囲まれ、塩害の影響を受けやすい環境にあるが、端島内には立地場所や潮を受ける方角によって様々な条件での劣化状況の建物を見ることができる。現在、新しいものをつくる時代から、今まで作ってきたものを維持・管理することが重要な時代になってきている。この分野の研究において端島は、この上ない研究素材になるのではないかと考えられる。

5. 近代化遺産としての保存・活用

この端島に関しては2003年8月に「軍艦島を世界遺産にする会」が特定非営利活動法人（NPO）認証を受けており、その文化遺産としての保存の動きも活発に行われている。

「近代化遺産」という言葉は、文化庁がネーミングしたものであり、その定義は「近代的手法によって造られた建造物（各種の建築物、工作物を含む）で、産業・交通・土木に関わるもの。」とされている。具体的なものには、造船所や鋳山・製鉄所・製糸工場・煉瓦製造工場などの産業関係、駅舎・機関車・橋梁・トンネル・軌道などの鉄道施設、道路橋・灯台・船舶などの交通関係、護岸・埠頭・防波堤などの港湾施設、灌漑用水・運河・ダム発電所施設・上下水道などの土木関係があるが、これらハードのみではなく、ソフトを含めたシステム全体として捉えられている。

端島は炭坑施設だけではなく、従業員宿舎、商業施設、娯楽施設を含め、島全体が一括してほとんど当時のまま残っている。このような形で現存する炭坑遺産は世界的に見ても極めて稀であり、端島は貴重な近代化遺産の一つと言えるのではないかと考えられる。

また、端島の近代化遺産としての活用については、2004年7月から軍艦島クルーズが始まっている。これに合わせて、2004年の5月から7月にかけて長崎広域

体験学習協議会や（社）長崎観光連盟が中心となり軍艦島クルーズガイドの養成も行われた。また、端島は修学旅行生などの学習素材としても事前学習、事後学習が行いやすく、修学旅行先としても早くも活用され始めている。このように端島は、地域振興の種として様々な形で活用され始めている。

6. おわりに

今回、この聞き取り調査により端島に関して元島民の方にもいろいろなお話を聞くことができた。そして、その中で著者らが最も印象に残っていることは現在とのコミュニティの違いである。近年凶悪な犯罪が増加しているが、これはコミュニティの崩壊とも何らかの関係があると考えられる。元坑員の子供が何気なく語った、次の言葉が印象的である。

「うん、狭い島やけんね、悪いことしたらすぐ捕まるけん。」

コミュニティの成熟さが防犯にも大きな役割を果たしていたのではないかと考えられる。

端島に関わる人の多くが当時のことを話す際、とても嬉しそうに語っていた。そのことを端島で生まれ育った元島民は次のように語った。

「私も島の出身の方に触れて、何が思い出かというところ聞くと、人と人との繋がりや思い出が一番あって皆さん言われるんですね。建物とかそういう思い出ももちろんあるけど、人と人との付き合いがものすごく思い出が残っているっておっしゃるんですよ。」

これほどまでに人と人との付き合いが深かった大きな要因として考えられるものが、地域内での交流機会の多さである。山神祭や野球大会を始めとして当時、端島では多くの催し物が行われていた。また、端島に住むほぼすべての人が炭坑になんらかの形で関わっており、同じ炭坑に従事する者としての仲間意識も大きかったのではないと思う。これらのことから、町内会のような一番小さな単位での自治体の交流機会の提供が、コミュニティに大きな影響を及ぼすのではないかと考えられる。そして、その最小単位での自治体が繋がっていくことで大きなコミュニティが形成されていくのではないかと考える。

また、端島の護岸や建物の劣化の状況、当時端島に住んでいた人々の高齢化などを考えると、端島を保存するのは今しかないと考えられる。このことを示すような端島で生まれ育った元島民の言葉を紹介する。

「今、思うのはもう、自分45歳やろ。まあ、自分も長くないけど。島のことをよく知っている人たちは、もっと高齢で。保存をやるのは今しかない。今、ほん

と最後のチャンス。」

今まで文化遺産の保存に関しては、建築物や施設などハード的な部分を中心に行われてきたと考えられる。今回、近代化遺産の保存の一例として端島についての聞き取り調査を進める中で、このようなハード面とともに人間の営みそのものを示すソフト面の保存の重要性も再検討することができた。このソフト面の保存が将来にもたらず糧は大きいと考えられる。

謝 辞

今回、聞き取り調査に快くご協力頂いた、端島で生活していた方々、および端島に関わりを持っていた方々には、心からの感謝を申し上げたい。

また、現地調査に快くご協力頂いた、NPO法人「軍艦島を世界遺産にする会」理事の松本氏、および快く現地調査の機会を与えてくださった高島町の方々に、深い感謝の意を表す次第である。

参 考 文 献

- 1) 阿久井善孝、滋賀秀美、「軍艦島実測調査資料集」、1984
- 2) NPO法人「軍艦島を世界遺産にする会」資料サイト：<http://www.interq.or.jp/cool/unya/gunkanzima/>
- 3) UFJ総合研究所ホームページ：
http://www.ufji.co.jp/artspolicy/newsletter/arts_nl/
- 4) Yahoo! 地図情報：<http://map.yahoo.co.jp/>